

シリーズ

豊中駅前歴史を振り返る

第2回 新開地市場の誕生から ビルの完成まで

このシリーズは、豊中駅前がどのように形成され、また変遷を重ねてきたかを振り返り、これからのまちづくりに活かしたいと考え企画しました。今回も引き続き松浦幸夫さんにお話を伺いました。

松浦幸夫氏プロフィール

昭和4年生まれ。豊中駅前生まれ育った。昭和54年豊中駅前七夕祭りを始めた。(有)まちづくり会社顧問。

—— 今日戦後の新開地市場のお話を伺います。前回で新開地は、ほとんど原っぱみたいなものだったということでしたが、いつ頃から市場になっていくのですか？

松浦 終戦直後は銀座通りに面して数軒のお店がありました。確か昭和23年と思うのですが、銀座通りにある「阪急市場」が火災に遭いました。それがきっかけで阪急市場の商店の多くが新開地に移りました。それに併せて近くからも遠くからもお店が集まって市場になりました。原っぱがお店で埋まるまでにはそんなに年数は掛からなかったと思います。

—— その市場が5階建てのビルになるのですが、そのあたりのお話を聞かせてください。

松浦 昭和37、38年頃に稲荷神社の鳥居と豊高道を挟んでライフができました。ライフの第1号店ですね。当時未だスーパーは珍しいものでした。このスーパーの登場が新開地市場に大きな影響を与えたと聞いています。このままでは駄目だと思った商売人が多かったのでしょう。また、その頃に豊中駅を2階建てにして、国道の上に人工広場をつくり東側と繋ぐ計画が持ち上がりました。新開地市場はその計画に乗り、人工広場とデッキで結ぶ5階建てのビルが昭和43年に完成しました。地下にはライフ、1階は市場、2階は文化用品やフランス料理店、3から5階は二チイと展望レストランと当時宝塚沿線の駅前のビルとしてはハイカラなものでした。人工広場の下は阪急バスのターミナルになり、東豊中や旭丘の団地をはじめ、バスと電車の利用者がどっと駅前に来るようになりました。私が商売している通りもその頃に「一番街商店街」と名付けられました。豊中駅前の黄金時代でした。ホテルアイボリーが建ったのもその頃です。



—— 新開地のお話を伺って、戦前から昭和までの豊中駅前の姿がよくわかりました。有り難う御座いました。(2009年2月17日松浦幸夫氏談。敬称は略させていただきます。)

※ まちづくり会社が昨年開催したアイボリーフォーラムで松浦さんが使用された写真集CD-ROM「戦前・戦後の豊中駅前」を販売中(2,000円)です。(お問合せは 06-6858-6190 まで)

まちづくり会社とは

正式名を「有限会社豊中駅前まちづくり会社」といいます。

我がまちを元気のある、住みやすい、誇りの持てるまちにしたいとの思いで事業者や住民が出資し、平成14年の12月に設立されました。事務所は銀座通りにある「まちづくりセンター」の中にあります。

まちづくり会社では

- 「まちづくりニュース」を月初に月1回、1万部発行しています。まちの情報やお店・企業の紹介などを満載。現在、月2回の定期発行を準備中です。
- 様々な分野の方々を講師に招き、お互いの感性と知性を磨きあう「アイボリーフォーラム」(毎月1回)、お年寄りから子供たちまで気軽に、身近に本物が味わえる「アイボリー寄席」(3ヶ月に1回)を開催しています。

ボランティアスタッフを募集しています

催し物の受付やニュース作成のお手伝いから、新たな人との出会いが生まれ、生活(人生)が豊かになること請け合い!! お問い合わせください。